

オーディオ実験室収載

SD トランスポートの製作と評価(3) —ハイレゾリューション対応トランスポートと DAC の試聴—

PC オーディオの DIY 実践者オーディオ仲間の B 氏はさらにハイレゾリューション対応固体メモリートランスポート/DAC を製作され、これを聴く機会がありました。このトランスポートは、当初の 48KHz,16bit 対応から 192KHz,24bit 対応を経て、352.8 KHz,24bit と 192 KHz,32 bit 対応が可能なものとなっています。このトランスポートから S/PDIF 出力が取りだされますが、同時に I2S で DAC 部に接続され、アナログ出力も出てきます。この DAC 部は ESS Technology 社のものを使用し、内部に 100MHz (10MHz の間違いではありません) の発振器を持っていて、これから派生するクロックで、シンクロナスで伝送された PCM 信号にリクロックをかけるようなことをやっているということです。

<http://www.esstech.com/PDF/Sabre32%20DAC%20PF%20100622.pdf>

構成は写真のようなブラックですが、クロック関係に ±12V の電池を使用するというようなことをやっています。



拙宅の機器への接続は、アナログ出力には Vital Audio の RCA ケーブルを使用しインフラノイズの RMS-1000 経由でプリアンプに入力します。S/PDIF 出力にはインフラノイズの BNC デジタルケーブルを使用し、インフラノイズの DAC-1 と RMS-1000 経由でプリアンプに入力します。試聴は DAC のアナログ出力とトランスポートの S/PDIF 出力を何回か切り替えて行いました。

352.8 KHz の音源はノールウエーの配信サイト 2L に 10 曲ほどあります。また、当方でも 192 KHz,24bit の音源を準備し、これらの音源は 32GB の SDHC メモリーカードにいれてトランスポートにセットします。

まず、DAC のアナログ出力ですが、352.8 KHz,24bit の音源では、ストレートな音がします。ピアノ独奏ではスタンウェイの頑丈なフレームの音が力強く響きますが、弦は芯があって若干きつめに表現されます。

次にトランスポートとインフラノイズの DAC-1 の組み合わせですが、352.8 KHz の音源は処理できませんので、192KHz の音源で試聴しました。その結果、一転して DAC-1 の 192KHz での DA 変換の実力が現れ、幅広いジャンルの音源に難色を見つけられないくらいに対応してくれました。

以上、まとめますと ESS チップを使用した DAC 部はオーディオ的にまだ十分に練り上げられていないせいか、本来の 352.8 KHz 音源のポテンシャルを評価するには至りませんでしたが、192KHz の音源でトランスポートのみ使用し、DAC-1 を通すとハイレゾリューション音源の良さを十分に味わうことができたと思います。

192KHz を超える音源のポテンシャルの評価は今後の DAC 部の改善次第ということになり、今後の発展に期待が持てます。

以上